

2020年3月11日発行

手紙における「手書き」がもたらす
コミュニケーション価値

宮 田 穰

相模女子大学紀要 VOL.83 (2019年度)

手紙における「手書き」がもたらす コミュニケーション価値

宮 田 穰

The value of communication brought by "handwriting" in letters

Minoru MIYATA

Abstract

In a book written in July this year, a communication analysis based on history, the latest usage status, and examples of letters that have been used and are still attractive today, and comprehensively discussed their values. One of the factors that supported the appeal of modern letters was the awareness that "handwriting" was involved. "Handwriting" is a style that has been continued for a long time in the history of letters, and has been a mechanism for creating various expressions using various writing instruments. "Handwriting" can also be said to be an action symbolizing analog communication.

In this paper, we focused on the value of "handwriting" in modern letters. And it was found that "handwriting" has a catalytic function that arouses imagination to the emotion and personality of the sender, and that it is transmitted according to the imagination of the receiver. In addition, the function that "handwriting" reduces the distance between the two sides, increases intimacy, and enhances the relationship of trust. From the above, it was hypothesized that "handwriting" is positioned as a necessary condition to support the charm of modern letters.

Key words : Letter, Analog, Communication, Handwriting, Media Richness

1. テーマ設定とその背景

2019年7月に刊行した拙著『ネット時代の手紙学』では、現代なおも活用され、魅力をもち続けている手紙について、歴史や最新の活用状況、事例などをもとにコミュニケーション分析を行い、その価値について総合的に論じた。そして結論として、現代の

手紙の価値とは、送り手の感情や人柄などを豊かに伝え合うことにより、その場にはいない相手を身近に感じつつ、心の対話を可能にすることであり、そのようなコミュニケーションを習慣的に重ねることで、親密さや信頼関係を向上させることにつながると述べた。それを踏まえ、現代の手紙について、改めて定義すると以下のようなになるだろう。

「手紙とは、その人らしく相手を思いやり、ゆっくりと心を通わせるメディアである。」(宮田、2019) ただ、上記拙著の中で、現代の手紙の魅力を支えている要因の1つに、「手書き」が関係していることへの気づきがあったが、十分な検討を行えず、残された課題の1つとなった。

「手書き」は、手紙の歴史の中で長く続けられてきた基本的な様式であり、多様な筆記具により多様な表現を生み出す仕掛けとなってきた。また「手書き」は、アナログによるコミュニケーションを象徴する行為ともいえる。

そこで、現代の手紙において、「手書き」がもたらすコミュニケーション価値とは何かにフォーカスし、本稿では考察してみたい。

2. 研究方法と仮説

今回の研究は、上記拙著で論じた内容をさらに深く掘り下げ、現代の手紙の魅力と意義について追究していくプロセスの1つとして位置づけられる。

方法としては、拙著で検討した手紙に関するインターネット調査結果の中で、「手書き」への受け止め方について触れた部分を踏まえつつ、大学のゼミナールの中でゼミ生と行った簡易実験の結果も加え、考察を行っていく。

また、本稿のテーマについて、現段階での仮説を述べると、以下ようになる。

「手書きは、手紙の魅力をさらに高める触媒として機能し、それにより双方の距離感を縮め、親密さや信頼関係をさらに高めていく役割を果たす。」

3. 前提となる理解

まず、考察の前提となる「手書き」の受け止め方について、整理しておきたい。

最初に、拙著で紹介した手紙に関するインターネット調査結果の中で、「手書き」に関わる部分を要約すると、次のようになる。ちなみに、この調査は2018年11月27～28日に、首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉）在住の15～75歳の男女を対象に行ったものである。そして、回答者のうち性別と世代を均等に50名ずつ抽出し、500名をデータ化している。

「まず、「手書き」の手紙について、もらうと嬉しく感じるか、またときに「手書き」の手紙を出す必要があると思うかについて聞いている。

「手書き」の手紙をもらう場合を見てみると、男

女差が明確に出ている。「とても思う」と回答した人は、全体で25.8%となっている。男性の場合は、60代以上のみが32.0%と平均を上回っている。それに対し、女性の場合は、50代の18.0%を除けば他の世代はすべて平均を上回っている。とくに、15～29歳が最も高く56.0%と半数を超えている。この世代は、ネットに最も親しんでいることを考え合わせると、意外な結果となっているように見える。ただ、見方によっては、ネットに最も親しんでいる世代だからこそ、「手書き」に新鮮な魅力を感じるとも考えられる。

次に、自由記述で書かれた理由をみていくと、「手書き」には「あたたかみ（温かみ、暖かみ）」、「こころ（心、真心）」、「気持ち」、「思い（想い）」が感じられる点に、良さを見出している回答が目立っている。また、「自分のために時間を割いて、手間をかけてくれた」という姿勢や、「その人らしさ（人柄、個性）」が伝わる点が、その好印象につながっている。

一方、否定的な受け止め方では、気持ちがこもり過ぎてかえって「重い」、返事を手書きで書くことを期待されていると考えたと「面倒」だとする回答が見られる。いずれにしても、送り手の心や気持ちが十分伝わるしかけとして「手書き」が機能していることは確かであり、受け手次第でその印象が変わることがわかる。

ところが、「手書き」で出す必要性の場合は、性差以外は「手書き」でもらう場合ほど、明確な差が出ていない。「とても思う」と回答した人は、全体で15.6%となっています。もらう場合の全体平均と比べると10ポイントほど差が出ている。男性では60代以上のみが16.0%と平均並みだが、女性の場合はすべての世代で平均を上回っている。やはり15～29歳が最も高く38.0%となっている。

さらに、自由記述では「手書き」が必要な場面として、「お礼」や「お詫び」がその象徴となっている。その理由としては、内容よりも気持ちや心が伝わること、それを相手に受け止めてもらうことに重点が置かれていることがわかる。心を込めて伝えるスタイルとして、通常とは異なる「特別感」や「丁寧さ」が、「手書き」には期待されているといえる。ただ、送り手が悪筆の場合は、印刷による活字の方がきれいだとか、そもそもメールで十分だとする意見も散見される。

要するに、「手書き」は手間がかかる一方で、あえて手間をかけたという姿勢や、その人らしさが伝

わりやすい工夫の1つであることは間違いない。ただ、そのような良さや工夫を認めつつも、直筆への苦手意識はとくに男性の方が持ちやすいため、少なからず否定的な受け止め方になりがちだと推察できる。」(前掲書、pp.57-60)

以上の調査結果について、少し補足すると、男女差は「手書き」に限らず、手紙に関する意識と行動全般にわたり見られる特徴となっている。

自由記述の内容については、「手書き」により次の3つのイメージが促進されることがわかる。

1つは、「あたたかみ（暖かみ、温かみ）」につながるイメージである。もう少し言えば、相手の「体温」であり、それが感じられる程度の親密さである。つまり、距離感の近さだといえる。

もう1つは、「こころ（心、真心）」、「気持ち」、「思い（想い）」につながるイメージである。あくまで受け手の想像できる範囲であるが、相手の内面のイメージを、「手書き」から感じ取っていることがわかる。「手書き」は文面の内容以上に、受け手の感情に作用する。

さらにもう1つは、「自分のために時間を割いて、手間をかけてくれた」という姿勢や、「その人らしさ（人柄、個性）」につながるイメージである。

これは、手紙から相手をまとまりのある存在として捉えようとするイメージである。そして、受け手に対する「こころ」「気持ち」「想い」が、どの程度なのかまで伝えられる。

以上を踏まえると、「手書き」はなぜ相手の「体温」、こころ、人柄、姿勢といったものを、受け手に届けやすくするのか。また、それにより双方の関係にどのような影響を与え合うのか。このような、さらなる研究視点が生まれてくる。

4. 「手書き」と活字の比較検討

次に、「手書き」への評価が高いと思われる20代女性が、「手書き」と活字との比較から、どのような「手書き」の特徴を受け止めているかについて、簡易実験を通して詳しく見ていきたい。

まず、実験の概要について述べる。対象は、ゼミナールを受講している3年生（20～22歳、女性）の5人である。

実験に使用した素材は、丸岡文化財団が毎年行っている手紙コンテストの中で「一筆啓上賞」(第25回、テーマ「母」)の受賞作品から3点を選び、それぞれ「手書き」によるものと活字化されたものを用意

した。

実験は、それらを見比べながらグループインタビュー形式で、彼らが受け止めた印象を定性的に評価するものである。なお実査は、2019年11月12日に行ったゼミの授業内で実施した。

では、実験の中で出てきたキーワードやキーワードを整理すると、以下ようになる。

①「手書き」から受け止めた印象比較

- 文字から想像力がかき立てられる。たとえば、性別や世代、性格がイメージできそうだが。
- 字の乱れなどから、感情の流れが見える。
- 文字から「肉声」が聞こえてきそうな気がする。
- 好きなペン(筆記具)が使い、それによって印象が変わる。
- 絵文字やイラストも使い、それによって印象が変わる。
- 「手書き」だと文字が不揃いで、読みづらい。

②活字(太明朝体)から受けた印象比較

- 読みやすい。
 - 文章が整然と並んでいて、すっと入ってくる。
 - 逆に文章内容が面白くても、心になかなか入ってこない。
 - 感情がみえにくい。
 - 段落など、形式的に書きがち。
 - 活字は人間臭さが消える。
 - 本当に人間が書いているのか、わからなくなる時がある。
 - 活字だと機械的な声が聞こえてきそうな気がする。
- 以上から「手書き」の特徴をまとめてみると、次の2点が浮かび上がってくる。

①「手書き」は、感情が伝わりやすい。

文字を通して伝わる感情は、文字の乱れや不揃いさなどから感じられる。手書きの場合は、自由にレイアウトできたり、絵文字やイラストを補足したりと、視覚に基づく多様な表現が可能だが、その豊かさが多様な感情表現につながっていることがわかる。

②「手書き」は、文字から想像力がかき立てられる。

想像力は、書き手のクセや読みづらさ、行間からかき立てられやすく、相手が「手書き」で書いたときの状況が現れやすい。たとえば、子どもは文字に成長過程が表れやすい。また、故人など、文字を通して当時の相手の様子を思い出す契機となりやすい。

その他「手書き」に関する補足的なコメントでは、次の点が指摘されている。

- 「手書き」には、コンプレックスを持っている人がいる。特に男性。

- 普段、誰かにメモを渡すときは、今でも「手書き」で書くことが多い。特に女性。

「手書き」コンプレックスについては、「手書き」の手紙を勧める上で障害にはなるが、以上みてきたように、文字のクセや乱れ、読みづらさがかえって、相手に伝わりやすいことを考えると、決してマイナスとはいえない。どちらかという、当事者の苦手意識や面倒くささが阻害要因になっていると考えられる。

5. 考察

それでは、前提となる理解、および「手書き」と活字の比較を踏まえ、考察を進めていく。

まず、「手書き」が相手との距離感にどう関わるかについて考えてみたい。

「手書き」は「直筆」ともいわれるように、相手が直接便箋に触れたものである。そして、その人自身の一面をさらけ出しているものでもある。その結果、その文字が達筆か悪筆かに関わらず、書き手らしさがにじみ出る。別の言い方をすると、文意以外はノンバーバルな情報であり、受け手に伝わる情報量は、活字の場合に比べると格段に増えることになる。さらに言えば、受け手に対してそこまで情報を開示してくれる姿勢に、受け手への「好意」が伝わり、それが親密さにつながる。つまり、「手書き」による身体性ゆえに、ノンバーバルな情報を伴いながら、相手に「好意」が伝わり、相手との距離が縮まると考えることができる。また、そのことが「手書き」を通して、相手の「体温」や「温かみ」を感じるといった「手書き」のイメージの受け止め方につながると考えられる。

このような「手書き」の身体性は、お互いに手をつなぐことや、握手、ハイタッチすることなど、手紙を通して直接身体的に触れ合うイメージに擬えらるとわかりやすい。

次に、「手書き」に伴う「時間性」との関わりについて考えてみたい。

「手書き」で文面を考えながら書くためには、一定の時間がかかる。書くスピードは、ゆっくりである。パソコンでキーボードにより書く場合と比較すると、スピードだけでなく疲労の度合いも異なる。

一方、自分の「手書き」のスピードに合わせ、考えながら書き進めていくことは、「間」を生み出すことにつながる。また、つい筆を滑らせて書き直すなど、なかなかスムーズに進まない作業になりがち

である。このように、相手のことや文面にいかに表現するかをゆっくりと考え、「手書き」の文字に記していく「間」は、自分と向き合いつつ、心のうちや深い思いを適切に表現しようと熟考する時間になる。そして、SNSのように返信を急ぐ必要もないため、推敲しながら言葉を丁寧に選びつつ、絵文字や簡単なイラストを添えるなど、ちょっとした工夫も可能となる。

このようにゆっくりと時間をかけ、丁寧に生み出された言葉や文面には、送り手の心のうちや深い思いが表現されやすく、それが相手に伝わりやすい。「手書き」は手間のかかる肉体的な作業を伴うことで、ゆっくりと考えながら書き進めるための「間」を生み出す。

「手書き」は、このような「時間性」を必然的に伴うことに大きな意味がある。なぜなら、その時間は相手のためだけに専有された時間だからである。つまり、丁寧に書かれた「手書き」の文面には、送り手が受け手のためにこれだけの時間を使ってくれたことが姿勢として受け手に伝わり、そのことへの「謝意」が生まれやすい。

最後に、「手書き」で生み出される手紙が、「一点モノ」であることの意味について考えてみたい。

相手のことを想い、オーダーメイドで生み出された手紙は、単なるメディアではない。それは贈り物であり、手元に残るものである。そして、文通のように手紙を交換することは、相手とのプレゼント交換に他ならない。つまり、「手書き」による「一点モノ」は、受け手にのみ特別な意味をもたらすとともに、互酬関係を築くことにもなる。

さらに、手元に残された手紙は、双方にとっての記憶の共有物である。手紙の文面は、書かれた当時の状況を瞬間的に封じ込めたものである。そのため、後日読み返すとき、当時の記憶がよみがえってくる。このことは、故人の手紙をイメージすればわかりやすい。

以上のように考えてくると、「手書き」には手紙の価値を高める視点を、いろいろ見出すことができる。

またそれは、アナログでの表現であり、コミュニケーションであることによるところが大きい。たとえば、ノンバーバルな情報はアナログだからこそ得られる情報の豊かさである。また、形ある「一点モノ」として手元に残ることは、単なる情報のやり取りに留まらないアナログの良さを感じられる。

考えてみれば、このようなアナログ・コミュニケ

ーションは、実にぜいたくなコミュニケーションだといえる。手間と時間が必要であり、人間が深く関与することが前提となっているからだ。

いずれにしても、「手書き」による手紙には、双方の距離感を縮め、親密さを増し、互酬関係を下地にした信頼関係を高めていく力があることが、以上の考察を通して理解できる。

6. 結論

現代の手紙にとって、「手書き」は手紙の魅力を高める「触媒」だと考えられる。「手書き」で相手のことを思い、時間をかけてゆっくりと認められていく行為そのものが、受け手への「好意」として伝わり、受け手の中に「謝意」が生まれる。そして、あくまでイメージの中ではあるが、双方が手紙を通して接触することで、距離感が縮まり、親密さと互酬関係が築かれていく。そのような繰り返しが信頼関係を少しずつ高めていくといえる。

多様なメディアが溢れている現代において、手紙は双方の心に深く作用するメディアとして、その特徴や魅力が研ぎ澄まされてきた。そのように改めて捉えてみると、「手書き」はそれを支える必要条件であることがわかる。

7. 今後への課題

本稿での考察を通して、現代の手紙における「手書き」の位置づけが、仮説的にイメージできた。

ただ、今後に向けた課題としては、以下3点が挙げられる。

①「手書き」と活字の比較検討をさらに推し進め、その質的な違いを高い精度で明らかにし、今回の仮説を検証すること。

②上記をさらに発展させ、アナログによるコミュニケーション価値とは何かを、手紙以外のメディアも含め、総合的に論じること。

③これからの時代のコミュニケーションにおいて、アナログの価値を適度に組み込むことで、デジタルの行き過ぎを調整しバランスをとるコミュニケーション・スタイルのイメージを確立すること。

まだ、多くの課題が残されていることがわかる。

参考文献

- （書籍）
大坊郁夫『しぐさのコミュニケーション』サイエンス社、1998
和田茂夫『「手書き」の力』PHPビジネス新書、2008
竹永絵里・土屋和全『伝わる手書きの練習帖』榎出版社、2016
吉田典生『「手で書くこと」が知性を引き出す』文響社、2017
宮田穰『ネット時代の手紙学』北樹出版、2019（その他）
「pen」2018年11月号、No.462、CCCメディアハウス（特集「手書きの味わい。」）
「趣味の文具箱」2019年7月10日、vol.50、榎出版社（特集「手書きっていいね！」）
「東京人」2019年12月号、no.418、都市出版（特集「偏愛文具 手書きを味わう」）